

第18代校長 丹呉善衛  
(創立80周年記念誌より)

平成2年(1990)7月、富岡惣一郎画伯の個展が上越市で開催され、画伯がおいでになった時のことである。樫野利雄同窓会長さんから、画伯をお訪ねするので同道しないかとお誘いがあった。高田商業高校創立70周年の折、記念式参列者に贈る記念品として版画色紙「妙高山」の作成をお願いした。そのお礼におうかがいしたいのだという。喜んでお供することとした。



大和デパート上越店の個展会場へお訪ねすると、画伯は初対面にもかかわらず気軽に迎えてくださった。芸術家の厳しい風貌を想像して緊張していただけに、ほっとするとともに率直で誠実なお人柄に魅せられた。そして会場の一隅でしばらくの間歓談させていただいた。

話が高田商工学校時代に及んだ時、画伯はぽつんと、「私が今芸術家としてあるのは、高田商工学校に学んだお陰です。美術学校で芸術の専門教育を受けていたら、私の芸術は生まれなかったろう」とおっしゃった。芸術とは縁遠いはずの商業教育が、なぜこの世界的に高名な芸術家を生んだのであろうか。それとも母校の校長に対する単なるお世辞なのであろうか、私が画伯の真意をはかりかねて怪訝な顔をしていると、およそつぎのような話をしてくださった。



富岡惣一郎画伯は、昭和9年(1934)に高田商工学校商業科へ入学した。そのころ、高田商工学校には商業科、工芸科の2学科があり、工芸科では木工と漆工芸を教えていた。ここには、数人の美術学校出身の教師がおり、工芸デザインの授業を担当していた。この教師たちとの出会いが、もともと絵の好きであった画伯の芸術に対する興味を深め、才能を開花させるきっかけとなった。教師たちに可愛がられた画伯は、図画の時間となると、生徒の引率を任せられ、よくお堀端へ写生に出かけたという。その頃、商工学校の校舎は、お堀端の近くにあった。

昭和14年3月、画伯は優秀な成績で卒業した。この年、三菱化成が九州に進出して工場を新設し、高田商工学校へ初めて求人を依頼し、新規卒業生の推薦を求めてきた。画伯は、学校の推薦を受けてこの会社に就職した。会社で最初に与えられた仕事は、船で運ばれてくる原料の陸揚げ作業であった。荒くれた沖仲仕を相手にしてのこの作業は容易ではなく、若い画伯を苦しめた。し

かし、この時の厳しい体験が、後年の創作活動にとって大きな支えになったという。

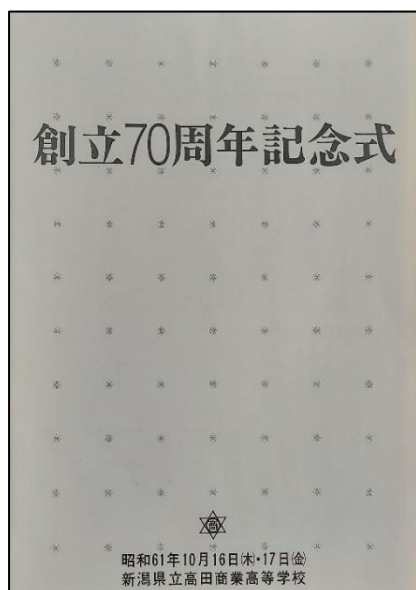


短い時間のお話であったが、画伯の意外な言葉に驚くとともに、母校に対する感謝の思いの深さに感動した。そして、この話を是非生徒に聞かせたいものと思った。お話を聞いた後、会場の作品を鑑賞させていただいた。壮麗な「トミオカホワイト」の様式美と画想を克明に仕上げていく技法に、高田商工学校での工芸デザイン教師との出会いや、三菱化成時代の貴重な体験が生かされているのではないかと思ひ、楽しいひと時を過ごした。

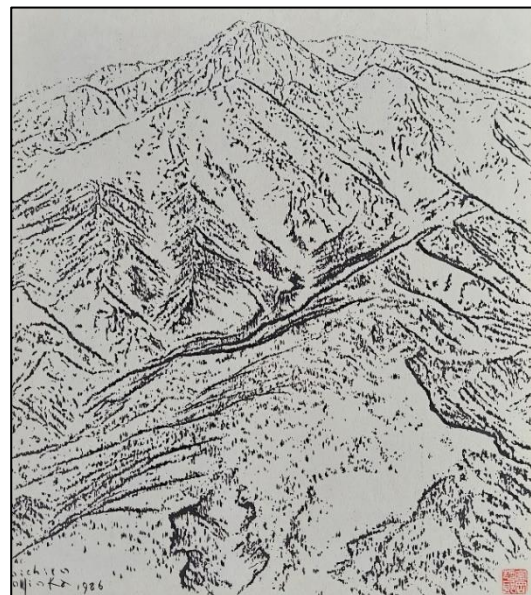
この折、記念に版画「花火 Fireworks W」を一点購入させていただいた。漆黒の空一杯に大輪の花開く雄大な構図である。今も応接間に掲げてある。この絵を観るたびに、他界された画伯の母校に対する印象深い言葉を思い出す。そして、画伯から後輩たちにお話ししていただく機会を、在任中につくれなかったことに悔いが残る。

高田商業高等学校は、第一次世界大戦中の大正5年(1916)、実業教育の振興が叫ばれる中で高田市立商工学校として誕生した。以来、80年の長い歴史を有する。この間、商業教育に対する社会の要請と学校への期待は幾多の変遷を経ているが、その時々々の要請や期待に応じて、1万3千有余人の人材を送り出し、社会に貢献してきた。

これからも、高田商業高等学校に対する要請や期待は時代の進展にともなうて変動し、これに伴って学校生活も変容するであろう。しかし、どのように変化しても、そこに学ぶ生徒に感動と生きがいを与え、富岡画伯の回想のように、私が今あるのは高田商業高校に学んだお陰ですと云われるような、そんな学校であり続けて欲しいと願うものである。



記念式々次第



「白の世界 妙高山」